

昔むかし、ある森に、けものたちがすんでいました。

けものたちの王さまはライオンでした。ライオンは、ときどき狩りに出て、けものをつかまえて食べました。けものたちはみな、いつ食べられるかとびくびくしていました。

ある日、けものたちは集まって相談しました。そして、次にだれがライオンに食べられるか、くじ引きで決めようということになりました。そうすれば、くじに当たらなかつた者は、しばらくは安心していられるからです。

ライオンはこの申し出に満足しました。

「けっこう。わしは、毎日の食べものがあればそれでいい。家来たちみんなを、毎日びくびくさせようなんて思っではないいからな」

あるとき、うさぎがくじに当たりました。うさぎは、ライオンに食べられるなんてまっぴらでした。

「こつちからすすんで食べられに行くなんて、ばかげてるよ。ライオンをだましてやつつけてやるうよ」

うさぎがいうと、みんなは笑いました。

「そんな小さい体でライオンをやつつけるなんて。おまえもずいぶんまいきになったもんだ」

朝になりました。うさぎは、なかなかライオンのところへ行こうとせませんでした。

ライオンはひどく腹をたてて待っていました。

昼ごろになって、ようやくウサギは出かけて行きました。うさぎは、うやうやしく前足をむねの前に組んで、おじぎをしていました。

「神さまが、いだいな王さまに、いつまでも幸せをめぐんでくださいますように」

ライオンは、うさぎに、

「おれの家来たちは、今、どうしているんだ」とききました。すると、うさぎはいいました。

「じつは、けさ早く、仲間のうさぎといっしょに、あなたに食べてもらうために出かけて来たんです。ところが、とちゅうで一頭のライオンに出くわしました。そのライオンは、

『おまえたちどこへ行くんだ』とききました。わたしは、

『王さまのライオンの所へ、朝ごはんになるために出かけるところです』と答えました。

するとそいつは、

『なんだと。わしよりえらい王がいるというのか。この国はわしのものだ。わしの家来に指一本だつてふれることはゆるさん』といったかと思うと、仲間のうさぎをつかまえて行ってしまったんです」

これを聞くと、王さまのライオンの心に、めらめらと怒りのほのおが燃えあがりました。

「わしをそいつの所に連れて行け」

うさぎは、「はい」といって、ライオンを深い深い井戸の所まで連れて行きました。そして、

「この井戸の中にあのおそろしいライオンがすんでいるのです。王さま、わたしは恐くてこれ以上近よれません。わたしをわきかかえて井戸に近づいてくださいませんか」といいました。

ライオンは、うさぎをわきかかえて、前足を井戸のふちにかけました。のぞきこむと、いつびきのライオンが、うさぎをかかえてこちらを見ていました。ライオンは、わきかかえていたうさぎを放り出して、井戸の中にとびこみました。ライオンは、おぼれ死んでしまいましたとき。

自分の力にうぬぼれて、用心をおこたつてはいけないというおはなし。

原話…『世界のメルヒェン図書館5』小澤俊夫編訳／ぎょうせい  
再話…村上郁